

研究プロジェクト一覧

2004年度 総合文化研究所研究プロジェクト

代表者◎印

「家族Ⅳ 家族の実相……概念と表象のあいまい」 継続

目的：継続テーマ＜家族＞研究の充実を支えるべく、家族論の視野と視点に即ちその深さとひろがりを与えるために、現代の家族象が呈示している実際を、①文学研究のたちばから、詩人と家族を②キリスト教学からスウェーデン社会をヨーロッパモデルの一つとして、③幼児教育学から家族の関係性のありようを考究し、家族の表象と概念の問題に展望をみちびきたい。2年度めには、＜絵画論＞的探究を追加。

◎岡崎 和夫	兼担研究員	詩業と家族・詩人の家族表象
志賀 智江	〃	幼児教育の論点からみる家族
大野 芳材	〃	家族の図表
野村 祐之	客員研究員	スウェーデン社会の家族概念とキリスト教

「女子高等教育の歴史、現在、未来」 継続

目的：21世紀に入って、他の領域と同様に、教育の世界も様々なチャレンジを受け、変動を求める波に巻き込まれている時代状況にあることは、疑いの余地がないであろう。青山学院は130年の歴史を刻んできたが、今この先の見えない時代に当たって、決して時代状況を無視することなく、しかし時代の渦に巻き込まれることなくさらに一歩ずつ着実に歩みを進めていくためには、自分たちの教育の在り方を根底から問い直す作業を、様々なレベルで行っていく必要があると思われる。

以上のような問題意識に基づき、青山学院創立130周年という区切りの年に当たって、短期大学の教育研究者共同体がなすことができ、またなすべき活動の一つとして、私たちは、「女子高等教育の歴史、現在、未来」という研究プロジェクトを立ち上げることとした。

このプロジェクトは、女子高等教育という視座を通して、21世紀における日本の高等教育の在り方、あるべき姿を摸索することを目的とする。プロジェクトの枠組みとしては、女子高等教育の歴史、現在を検討し（主に初年度）、そこから未来を展望する（主に二年目）、という道筋をとる予定である。

そして各研究員は、上記の趣旨に基づいた講演会、シンポジウム、訪問等を企画していくとともに、プロジェクトの成果をふまえて、それぞれの専門分野から、多面的に、女子高等教育について研究や調査を展開していく。

◎伊藤 勝啓	兼担研究員	女子高等教育の神学的意味
加納 孝代	〃	アメリカの女子大学の歴史と現状
渡辺 良智	〃	女性にとっての高等教育、学歴の意味
河見 誠	〃	フェミニズムと自然法論と女子高等教育
横堀 昌子	〃	女性の生活・労働と女子高等教育

「アジアの生活と文化」 新規

目的：20世紀の社会をリードしたのは欧米であり、世界の政治・経済は欧米の価値観を基準にグローバル化しつつある。科学技術の進歩により人類に繁栄がもたらされたのは20世紀であるが、自然環境が破壊され、民族対立や宗教紛争が激化したのも20世紀である。世界は、欧米だけで動いているのではない。アジア、アフリカなどそれぞれの地域には独自の生活や文化がある。前世紀のマイナス面を反省し、多文化共生が21世紀には期待されている。本研究は、アジア地域における固有の生活と伝統、およびそれらを支える文化的な考え方などを解析し、グローバル化しつつある世界における多文化共生のあり方を探ることを目的とする。研究分担者は、アジアの生活と文化の視点からそれぞれの研究を深める。

◎松本 美鈴	兼担研究員	東アジアの食文化
八耳 俊文	〃	中国における近代科学の受容
渡邊 良智	〃	日本人のアジアイメージ
関谷 雄一	〃	現代アジア社会の家族・組織・共同体
鈴木 すゝ江	〃	アジア文化における和紙の特殊性

「環境を場とした都市論」 新規

目的：21世紀になって都市（city）あるいは大都市（megapolis）は人間が生活する場としてそこに生きる生活者にとって大きな課題となっている。我々が20世紀に建設してきた大都市は、“西洋近代”の意味やメッセージを具体化し、システム化された人工物で満ちた都市文化の繁栄の場となっている。建築家は自己の作品を意味づけ提示する空間として都市を見、その結果我々は創造性（creativity）の成果としての都市の有様を観察できる。しかし、生活者にとって都市は公共性の場であり、これを取り巻く環境でもある。本プロジェクトは都市を環境と捉え、自然環境と都市の共生の在り方、創造性と公共性の活闘の場としての都市を新たに意味づけ新しい学際研究の場を創設する。

◎石黒	いずみ	兼任研究員	現代都市の空間論
橋本	典子	〃	新しい都市哲学、ウルバニカ
松村	伸一	〃	19世紀のイギリスの都市と文学